
DRAGON TEAR

大福もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D R A G O N T E A R

【Nコード】

N 5 0 1 0 L

【作者名】

大福もち

【あらすじ】

今は昔。ドラゴンという「イキモノ」が存在した。そして、そのドラゴンが原因で、世界は滅び、そしてまた、世界が復活した。――

――現在。洞窟をぬけると、そこは不思議な世界でした。ある世界の少年とこの世界の少女が出会い物語がはじまる。

D r a g o n T e a r & l t ; ドラゴンのナミダ & g t ; (前書き)

文章がなにかおかしい，漢字が違うなどがありましたら，遠慮なく教えてください。小説を書くのは，はじめてなので…。

こんなわたしですが，よろしく願います。

小説を読んでいたけると，とってもうれしいです。

感想を書いていただいたり，お気に入りに登録していただいたりすると，もっとうれしいので，できれば，願います。

D r a g o n T e a r & l t ; ドラゴンのナミダ & g t ;

＋＋プロローグ＋＋

今は昔、ヒトからも動物からも恐れられ嫌われている「イキモノ」がいた。

ドラゴンである。

ドラゴンは、ヒトに生贄を求め、動物を意味なく喰い殺した。

何年間も、何百年間もドラゴンは殺し続けた。

そう。

すべてのありとあらゆる「イキモノ」を喰い尽くしたのだった。

そして、

誰もいなくなった。

ドラゴン以外の生きているものは、もう、なにもない。

ドラゴンは、ひとりになったのだ。

たった、ひとりに…。

ドラゴンは、寂しさをおぼえた。

そして、同時に、悲しさをおぼえた。

ドラゴンは、後悔をした。

なぜ、自分はこんなにも「イキモノ」を殺してしまったのか。

なぜ…

どうして…

なんのために…

コロシテシマッタノダロウカ…。

ドラゴンの目から一筋のナミダがこぼれ落ちた。

それを合図に、ナミダが次から次へとこぼれおちてくる。

ドラゴンは、泣き続けた。

いつまでも、いつまでも…。

そして、

どれくらいもの間、泣き続けたのだろうか。

ある時、ドラゴンの目から、赤い滴がこぼれ落ちた。

そう、

血のように赤い滴が…。

そして、その瞬間。

光がドラゴンをやさしく包みこんだ。

そしてそれは、とても温かった。

そして、とても幸せだった。

だが、光は消えてしまった。

しかし、ドラゴンの目には、信じられない光景がうつっていたのだ。

そう、

その光景とは…。

ドラゴンが、殺して死んでしまったはずの、「イキモノ」が…

ヨミガエツタノダ。

ドラゴンは、それはとてもとてもうれしかった。

そして、誓った。

二度と、「イキモノ」を殺さない…。

そして初めて、この世界に平和が訪れた。

そしてそれは、いつまでもいつまでも続いたとき。

めでたし、めでたし。

そして、この出来事をヒトは「Dragon^{ドラゴン} Tear^{のナミダ}」という。

D r a g o n T e a r & l t ; ドラゴンのナミダ & g t ; (後書き)

この小説を読んでいたいただき、ありがとうございました。

テストが終わったら、第一話を書きたいと思います。

つまらない、飽きた、と思わずに、次のストーリーを読んでいただけると、ことばにならないほど嬉しくなります。

それでは、今後もしよろしくおねがいします。

不思議な夢（前書き）

本当に…スミマセン！！

第1話を投稿して、1週間ごとに出すみたいなのを言っていたのに…。

私ったら、3ヶ月も…！

本当にすみませんでした。

こんな私ですが、今後とも宜しくお願いします。

そう思いながらつらはは、制服に着替えた。

私、川田つらはは、15歳の中学3年生だ。

両親は、旅行関係の仕事に就いていて、今はフランスに行っている。だから、姉が面倒を見てくれてる。

ついでにいうと、私と姉と両親は、家賃が安かったために、小さいこじんまりとした山に暮らしている。

でも、ただの山じゃなく、いわくありげの山なのだ。

隠し洞窟、神無湖、死人ノ河など名前からして、不気味なものが沢山ある：らしい。

私は、一度も行ったことがないから、詳しいことは、全くと言っていいほど、知らない。

まず、何処にあるのかも、分からない：。

あれ：、私、どうしてこんなことを考えてるのかな：。

「おはよっ！」

そう元気よくあいさつしてきたのはつららより5歳上の姉であるあやめだ。

まったく、人の気も知らないで：。

「おはよう。はあゝ…。」

いつもどおり言ったつもりだったのに、あやめがなにかを察したようだ。

「どうしたの？なんか最近元気ないよ。そんなため息なんてついちやってさ。なんかあったの？」

「なんにもないよ。私，低血圧だから。」

夢が怖かった…なんて言える訳がない。

しかも，あやめに。

「じゃあ，行ってくるね。」

なんか言われないように，少し早めに，逃げるようにして出た。

不思議な夢（後書き）

こんにちは。

大福もちです。

本当に、こんなに投稿するのが遅くなってすみませんでした。

せっかく、私の小説を読んでくださる方がいたというのに…（泣

でも、これには、いろいろと訳があるのです。

中間テスト、期末テストなどのテスト三昧。

勉強合宿、部合宿などの合宿等。

夏休みの大量の宿題…。

こんなの言い訳で…，

言い訳なだけに，いいわけないにしょうけども…。

忙しかったんです。

クロトンネルさん，フィオネさん…

こんな私共のストーリーを読んで下さり，

本当に有難うございます。

嬉しくて、嬉しくて…涙が……ウぐっ

今後とも、本当に宜しく願います。

導かれる者（前書き）

今回は、この前のことに反省し、早めに投稿させていただきました。
好きに、自由に書いたので、つまらないかもしれませんが、
どうぞ、気楽に読んでください。

間違い、ちょっとこの文は変だ、と思ったら教えてくださるとうれ
しいです。

導かれる者

川田つららは今朝の夢のことなど忘れて誰もいない山道を、鼻歌を歌いながら歩いていった。

そう、いつもどりの道、歩きなれている道を、歩いているはずだった。

はず………だった？

「あれ……？」

ふと、つららは我にかえった。

目の前には、今までに見たこともないところだった。

「ここ……どこ？」

この森は、慣れているから迷うはずは、ないのに……！？

どうして…。

そう、つららの目の前には、見たことのない…

綺麗な小川、湖、そしてその奥にある、洞窟…。

ふと、つららの頭の中に、今朝考えていたことが、よぎった。

死人ノ河，神無湖，隠し洞窟……

怖い………。

戻らないと…。

でも，どうやって…？？

前にすすむ？

行く？

少し，ちよつとだけ…ほんの少しだけ……。

“キニナルノ？”

つららが混乱していたときだった。

どこからか，声が聞こえてきた。

「誰っ！！」

考えるまもなく，つららは叫んだ。

けれども，それに関する答えは返ってこなかった。

“コッチニキテ”

「どこ…？」

つららは、何も考えず、前に一步進んだ。

河に入ってしまった。

が、つららは、気にすることもなく、

また一步と進んでいった。

まるで、何かに導かれているように…。

気がつくと、つららは、暗闇の中にいた。

水の流れる音はするけど、視界はゼロ。

ここは、何処なのだろう。

つららは、とりあえず、進んでみた。

歩いて歩いて…。

一体どれくらい歩いたのだろうか。

一度、立ち止まってみた。

暗闇のなか、一向にヒカリが見えない。

もう少し歩こう、

そう思い、一歩足をふみだした、

その時……！！

つららは、浮力を感じた。

そう、つららは落ちていたのだ。

暗闇で、視界がゼロのため、気づくのに時間がかかった。

「キヤアアアアアああああああアア……！！」

そして、つららは、そのまま気を失った。

導かれる者（後書き）

こんな、ダラダラと書いてしまい、スミマセン。

まだ、ヒロインしかでていませんが、実は、主人公は男なのです。

主人公は、次の話にだすつもりなので、楽しみにしててくれると、うれしいです。

次も、早く、できれば、1週間以内に投稿するつもりです。

本当かあ？

と思った方……

いると思います。

でもきつと大丈夫！

今回は、行事といっても、せいぜい、体育祭くらいなので、

全くといっていいほど、忙しくありません。

なので、これからも、どうぞ、宜しくお願いします。

次回

つららの運命はたして！？

あなたは…だれ？

リオン（前書き）

もう、あれから、全くとっていいほど投稿していなかったの
自分でも、なにがなんだかよく分かりません。
意味が分からないかもしれないかもしれませんがまあ、読んでみて下さい。

リオン

どうして…

なんで…

なんで、みんなは、そんな目でおれをみるの……？

冷たい目で…。

おれが…みんなと違うって言うの？

おれが、何をしたって言うの？

わかんないよ…。

もう…嫌だよ、怖いよ…。

おれだって、みんなと同じ普通の人間なんだ！！

ピピピピピピピッ

「んゝゝゝゝ。ねむい…。もう…、すこし。…いでっ」

目覚まし時計を止めようと手を伸ばして、リオンはベットから落ちた。

「今日は、何をしようかな。ククッ。」

「あ、そうだ。あそこに行こつと。」

そうして、リオンは一目散に部屋から出て行った。

そうして間もなく、学校の先生がリオンの昨日の悪事を説教しようと部屋の戸を叩いた。

「リオン、リオン、、ん？」

「いない、、」

「あいつ、何処にいった？」

リオン（後書き）

もうすっかりわすれていました。

すみません。

もしこれが仕事だったのならば、即クビですねw
まあ、そんなことはまずないと思いますが、、

この話どうしよう。

もう本当に、すっかり忘れてしまったんです。

新しく書き直そうかな。

今回は無理やり書いてみたけど、

やっぱり、話を通じさせるのには、限度がありました。

もう、どうしよう。

悩みます。

この小説をよんでくださった、その、あなた。

どうしていいのかわからない私に答えを下さい m（　　） m

今回はこんなくだらなものを読んでいただきありがとうございます
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5010/>

DRAGON TEAR

2011年10月6日16時59分発行